



舞鶴医療センター便り

虫さされ



虫さされは大変身近な皮膚病で、一般的には蚊やノミに刺されたことによって生じるかゆみの強い赤いぶつぶつという印象があると思います。しかし実際には蚊やノミ以外にも様々な虫が人をさしたり、咬みついたり、皮膚から血をすって被害を与えます。

① 吸血する虫

● 蚊

蚊は人家周辺、山野などどこにでも生息し、顔、手足などの露出部を刺します。蚊に刺されたときの皮膚反応としては、刺されてすぐに出現する発赤、かゆみ（即時型反応）と、刺されて1～2日で出現する発赤、かゆみ（遅延型反応）があります。これらの反応は年齢とともに変化します。一般に乳幼児期には遅延型反応のみ、幼児期～青年期には即時型反応と遅延型反応の両者、青年期～壮年期には即時型反応のみが出現し、老年期になるといずれの反応も生じないとされていますが、実際には個人差がかなりあるので一概にはいえません。

● ノミ

ノミによる被害はほとんどがネコノミによるものです。ネコノミは野良猫や犬の体に寄生して吸血します。メスは庭や公園などの土のある所に卵を産み、そこで幼虫が育って成虫となります。そこに人がやってくると地面から成虫が足元に飛びついて吸血します。そのためスネや足を集中的に刺されるのが特徴で、しばし水ぶくれを作ります。

● ブユ（ブヨ、ブト）

高原や山間部の溪流沿いに多いため、野外レジャーの際に刺されます。ブユは朝夕に活動することが多く、特に露出したスネ付近を刺される人が多いようです。通常は刺されている時は痛み、

かゆみをほとんど感じず、刺されて半日くらいすると刺されたところが赤く腫れて次第に激しいかゆみを生じます。そして赤いしこりができて長く残る人もいます。

● ダニ

室内ではネズミに寄生するイエダニによる被害が多いです。イエダニは体長 0.7 mm 前後と小さく、寝ている間に布団に潜り込んで吸血するため、刺されている場面はほとんど見ることはできません。顔や手足は刺さず、わき腹や下腹部、ふとももの内側などを刺して、かゆみの強い赤いぶつぶつができます。

イエダニとは別に山でのハイキングや野外レジャーの際にマダニによる刺咬を受けることがあります。野生動物に寄生していますが、ヒトの体に取り付いてわき腹やふともも、陰部などの皮膚に咬みつき吸血します。数日後にはダニの腹部が数 mm 大に膨らみ飽血状態となって脱落します。無理に引き抜こうとすると頭部が皮膚に残って炎症を起こすことがあります。ダニの種類によってはライム病や日本紅斑熱などの感染症を媒介することがあります。

② 刺す虫

● ハチ

刺すハチとしてはミツバチ、アシナガバチ、スズメバチが代表的です。庭木の手入れや農作業、林業、ハイキングなどの際に刺されることが多く、特に秋の野外活動での被害が多いので注意が必要です。ハチに刺されるとハチ毒の刺激作用による激しい痛みが出現し赤くはれます。初めて刺された場合は1日以内に症状は治まりますが、2回目以降はハチ毒に対するアレルギー反応が加わるため、刺された直後からジンマシンを生じたり、刺されて1～2日で強い発赤と腫れを生じたりします。個人差が大きいですがひどい場合には刺されて30分～1時間で意識消失や血圧低下などのアナフィラキシーショックをおこし、死に至ることがあります。

③ 触れることで皮膚炎を起こす虫

● 毛虫

有毒毛をもつ一部の毛虫（ドクガ、チャドクガ、イラガなど）に触れた場合に皮膚炎を生じます。ドクガやチャドクガの毒針毛は非常に微細で、幼虫1匹に数十万本以上が密生しているため、これに触れると激しいかゆみを伴うジンマシンのような症状、あるいは赤いブツブツが多発します。これは首や腕に集中して生じるのが特徴で掻くことで次第に増数します。イラガの毒棘に触れるとその瞬間にびりびりとした激しい痛みと発赤が出現し、1～2時間で一旦治まります。その翌日に同部が赤く腫れてかゆみを生じることがあります。

治療

虫さされの治療は軽症であれば市販のかゆみどめ外用薬でもよいです。赤みやかゆみが強い場合はステロイド外用薬が必要です。症状がつよい場合は皮膚科専門医を受診するのがよいでしょう。ただ原因虫からの回避、駆除対策を実施しなければ新たな虫さされの症状が現れる可能性があります。

(文責：皮膚科 近森 亜紀子)

発行元：舞鶴医療センター 広報委員会